

恩地孝四郎年譜

西暦、年号、年齢、●事項

三木哲夫編

凡例

- 展覧会は、展覧会名・会場の順に記し、会期は省略した。
- 作品は《 》で括り、続いて制作年（発表年が同年の場合は省略）を記した。
また、作品名は原則として『恩地孝四郎版画集』（1975 形象社）所収の「作品目録」に拠ったが、必ずしも統一をとっていない。
- 作品の種別について、特に断りのないものは版画である。
- 書籍は『 』で括り、続いて発行年（発行年が同年の場合は省略）、発行所の順に記し、発行日は省略した。
- 旧字は原則として新字に改めた。
- 典拠は省略した。
- 〔 〕内は編者補記を示す。

1891年（明治24）0歳 ●7月2日、恩地家の第5子4男として東京府南豊島郡淀橋町元柏木村404番地に生まれる。父轍は和歌山県の出身で、当時東京地方裁判所の検事の職にあり、その後北白川宮家の家令、内大臣秘書官、宮内省式部官などを務める。母頼は京都の出身で、轍の二番目の妻。兄弟に長男剛、次男克二郎（先妻の子供たち）、三男哲三郎、長女加壽恵、妹律子がいる。

1896年（明治29）5歳 ●この年か 父、漢学者谷口藍田を自宅（麴町区下六番町）に招き、恩地塾を開く。また、明治天皇より後の東久邇宮、朝香宮の教育を託され5年間自宅に預かる。

1898年（明治31）7歳 ●4月、東京市立番町尋常高等小学校尋常科に入学。

1904年（明治37）13歳 ●3月、東京市立番町尋常高等小学校高等科を卒業。4月、父の希望で医者になるため、独逸学協会学校中学に入学。

1907年（明治40）16歳 ●4月、三兄哲三郎没（享年20）。

1909年（明治42）18歳 ●3月、独逸学協会学校中学を卒業。同月、第一高等学校受験に失敗。12月、竹久夢二の『夢二画集 春の巻』（洛陽堂）が出版され、その読後感を自宅に近い夢二の下宿先に置いてくるが、遊びに来るよう折り返し葉書が来る。このことを切っ掛けに夢二との交友が始まり、多くの感化を受ける。

1910年（明治43）19歳 ●1月、妹律子没（享年17）。3月、次兄克二郎没（享年34）。4月、東京美術学校予備科西洋画科志願に入学。同級生に宮武辰夫がいた。同月、竹久夢二の『夢二画集 夏の巻』（洛陽堂）の巻末に、夢二に送った『夢二画集 春の巻』の読後感が掲載される。この年 長原孝太郎、小林鍾吉が指導する白馬会原町洋画研究所に通う。当時この研究所には、後に交友を結ぶようになる池内三郎、大槻憲二、田中恭吉、田中二郎、土岡泉、久本信男、藤森静雄、三並俊（花弟）らがいる。

1911年（明治44）20歳 ●4月、東京美術学校予備科彫刻科塑造部志願に入学。彫刻科塑造部志願に久本信男、永瀬義郎、

西洋画科志願に大槻憲二、藤森静雄、日本画科志願に田中恭吉、土岡泉も入学。6月、竹久夢二、田中順之輔、久本信男（DON）、宮武辰夫と『都會スケッチ』（洛陽堂）を刊行。7月、西川光二郎著『悪人研究』（洛陽堂）を装幀。現在確認できる恩地の最初の装幀本。10月、竹久夢二の主宰雑誌『櫻さく國 白風の巻』（洛陽堂）に絵と詩を発表。同月、白樺社主催泰西版画展（赤坂・三会堂）を観て、エドワルド・ムンクの木版画に刺激を受けたという。

1912年（明治45・大正元）21歳 ●3月、この頃までに田中恭吉との交友が始まる。同月、竹久夢二の主宰雑誌『櫻さく國 紅桃の巻』（洛陽堂）に絵と詩を発表。田中恭吉も詩を寄稿。4月、東京美術学校予備科西洋画科志願に再入学。この年の彫刻科塑造部志願に香山藤禄〔小鳥〕がおり6月頃には交友が始まる。11月、第1回竹久夢二作品展（京都府立図書館）の応援に田中恭吉と共に行く。田中との交友深まる。

1913年（大正2）22歳 ●6月、友人の香山藤禄没（享年21）。10月、田中恭吉が編集を手伝っていた雑誌『少女界』第12巻第10号（大洋社）に文と挿絵を発表。翌月も扉絵を発表。11月、竹久夢二著『どんたく』（実業之日本社）を装幀。12月、田中恭吉が編集を手伝っていた雑誌『少年界』第12巻第12号（大洋社）に「恩地うさぎ」の名で扉絵〔原画は油彩画《初冬》〕を発表。同月、大槻憲二、田中恭吉、藤森静雄らの回覧雑誌『密室』（5月創刊）に参加し、第6号に《LA [LE] POT NOIR》（ペン画）など3点、詩「かぎりなき かんしゃのこころ」、エッセイ「自己について」を発表。同月、田中恭吉より木版画試作《権の樹立》《月夜（GETSUYA）》《赤き死の仮面》を贈られる。

1914年（大正3）23歳 ●1月、姉加壽恵の甲府県立高等女学校在職中の教え子で、当時恩地家に寄宿していた女子美術学校学生の小林のぶと婚約。同月、この頃か、版画を始める。田中恭吉の下宿先に同居していた大槻憲二は「木版画の興味は〔田中から〕藤森に伝わり恩地を動かした」と証言する。2月、『密室』第8号に《交番のある風景》（ペン画）、短歌「そのころ」、「感想」を発表。田中恭吉は木版画を発表。なお、同誌は翌月の第9号で終わる。3月、DER STURM 木版画展（日比谷美術館）を観る。同月、洛陽堂から10月をめどに自画・自刻の木版画集を出してもらえることとなり、それまでの間、力を付けるために3人だけの私家版の版画集を作ることとする。また、雑誌名を「月映」（つくはえ）と決める。4月、自画・自刻・自摺の木版画集『月映Ⅰ』（ラシャ紙のたとう入り、3部限定の私家本）をまとめ、《草の芽と少年》《受胎》などを収める。その後、7月にかけて6輯まで発行し、《めぐみのつゆ》《徂春》《キリストとマリア》《赤き実を持つ少女》《うかむ種子》《望と怖》《抒情Ⅱ》《裸形のくるしみⅠ》《抒情Ⅶ 伴病めり》など31点を発表。同月、田中恭吉、結核療養のため和歌山の自宅へ帰郷。9月、予定を1ヵ月繰上げ、田中恭吉、藤森静雄と自画・自刻木版と詩歌の雑誌『月映Ⅰ』（洛陽堂）を刊行。《抒情Ⅰ》《ただよへるもの》《夏日小景》など5点を発表。同月、この頃、藤森静雄と北原白秋を訪ねるという。10月、「港屋」開店（日本橋区呉服町）。同店には竹久夢二の手作り品だけでなく、月映同人の自摺木版画数点も並ぶという。同月、第1回港屋展覧会